

能勢の里山活力創造戦略

～活きている里山で、災害に強く、活力のある、自然豊かな地域づくり～

（能勢町生物多様性地域連携保全活動計画）

平成 31 年 3 月 策定

能勢町
（能勢の里山活力創造推進協議会）

目 次

はじめに ～能勢町の里山の「素晴らしさ」を活かしませんか？～	1
1. 戦略策定の社会的背景	2
1.1. 能勢町の里山と生物多様性	2
1.2 能勢町の里山の危機	3
1.3 「能勢の里山活力創造戦略」とは	3
2. 能勢町の地域特性 [現状把握と課題の抽出]	5
2.1. 能勢町の基本情報	5
(1) 能勢町の基本情報	5
(2) 能勢町の社会的・経済的立地	5
2.3. 能勢町の里山における自然環境	6
(1) 特徴	6
(2) 脅威	10
2.4. 能勢町の里山における農林業	12
(1) 特徴	12
(2) 脅威	16
2.5. まとめ (能勢町の活かしたい「里山資源」と「課題」)	17
3. 「能勢の里山活力創造戦略」の内容	18
3.1. 戦略策定と実行に向けての考え方	18
3.2. 戦略の目標	19
(1) 目標 1 『グリーンレジリエンスを活かした災害に強いまち』	20
(2) 目標 2 『都市近郊にあって生物多様性の高いまち』	22
(3) 目標 3 『活力ある農林業のまち』	22
(4) 目標 4 『里山資源の魅力を発信するまち』	22
3.4. 目標の達成に向けた施策の策定	23
(1) 施策 1：グリーンレジリエンスの向上 (災害に強いまちづくり)	23
(2) 施策 2：里山資源を支える生物多様性の保全	26
(3) 施策 3：農林業の活性化	27
(4) 施策 4：里山資源の魅力発信	30
(5) 施策の推進のために	31
3.5. 里山資源利活用のための地区と重点施策の設定	33
(1) 能勢町全域を対象とする重点施策	33
(2) 地区ごとの特徴的な里山資源と重点施策	34
4. 地域戦略の実施と点検、フォローアップ	51
4.1. 戦略の実施体制	51

はじめに ～能勢町の里山の「素晴らしさ」を活かしませんか？～

能勢町民の皆様が、これまで「当たり前」のものとして見てきた能勢の野山は、日本でも有数の生物多様性を誇る「里山」という素晴らしい資産であり、それは農林業等の日々の生活の中で培われてきたものです。

能勢町の里山は栗栽培やほだ木採取等の「生業」^{なりわい}を通じた管理によって「活きた里山」が維持され、大都市近郊にも関わらず国内でもトップクラスの豊かな生態系を誇ります。また、里山の地域資源（以下「里山資源」といいます。）を日常から使って生活していた、先人たちの知恵が今なお残る地域です。

しかし、社会情勢・自然環境の変化により、里山資源が劣化したり、上手な使い方が次世代に伝わらない等の問題が生じています。

このような状況の中で、本戦略は能勢町の人々が里山との関係を見つめなおし、「時代に合った」活かし方を創り出す、その道標となることを願って作成したものです。

能勢の里山の素晴らしさ、里山資源の賢い利用法を町民の皆様と推し進めて未来に伝えるために、これから行うことを施策としてまとめました。

しかし、施策は私たちだけで実行・達成することはできず、町民の皆様の協力が必要です。是非皆様には、本戦略を「自分ごと」と捉えていただき、能勢町の活性化のために力を貸していただきたいと思います。

※本戦略は、環境省の生物多様性地域連携促進法に則った取組です。「地域連携保全活動」により、生物多様性保全だけでなく、人と人、人と自然のつながり、地域への誇りと愛着、地域の活力が生み出され、それぞれの抱える課題を乗り越えるきっかけとなることが期待されています。



能勢の里山のイメージ

1. 戦略策定の社会的背景

1.1. 能勢町の里山と生物多様性

能勢町は大都市近郊に位置するにもかかわらず、希少な生きものが多数生息・生育し、町内に環境省の「生物多様性保全上重要な里地里山」に選定されている里山が多くあります。また、全国の665自治体を対象に都市域の生物多様性の豊かさなどについて調査し、2016年に公表された「全国の優れた生物多様性自治体ランキング」¹で1位として評価される等、国内でトップクラスの生態系の豊かさを備えている自治体です。

この能勢町の豊かな生物多様性は、栗栽培やほだ木づくりをはじめとする「里山」を活用した産業を通じて、草地や里山林などの多様な生きものの生息環境が維持されることで培われてきました。

さらに、能勢町の里山は今なお人々によって管理・利用され、生物多様性だけでなく、能勢町独特の里山景観や生活文化等の「里山資源」が維持されています。

「里山」とは

- ・ 都市部と奥山（人があまり立ち入らない人里離れた山を指す）との中間に位置し、集落や雑木林、農地や果樹園、ため池、草原など、様々な環境から構成される地域です。
- ・ 農林業など、人々の生活のために日常的に利用・管理されることで上記の環境が形成され、維持されてきました。
- ・ 様々な環境が混在することで、数多くの生きものが生息・生育し、生物多様性の高い環境となっています。
- ・ 人々の生活様式の変化により、利用や管理の手が入らなくなったことで、森は常緑樹や竹が増えて暗くなり、田畑は放棄されて藪になるなど、全国的に荒廃が進んでいます。
- ・ そして里山特有の動植物の減少、生物多様性の低下など、様々な問題が起こっています。

能勢町の「里山」の特徴

- ・ 能勢町では、一般に「里山」という言葉はなく、前述のような環境は「野山」と呼ばれてきました。
- ・ 山裾等の斜面地にクリ林が分布し、クリ林の背後にある台場クヌギ林やクヌギ・コナラ林、アカマツ林、スギ・ヒノキ林と、手前にある集落や棚田と一体となった独自の景観を形成し、「くり山」と呼ばれています（写真 1）。

¹三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社・都市の生物多様性指標研究会（2016）
「生物多様性に優れた自治体ランキング（生態系の豊かさと便益を評価する指標群）」



写真 1 能勢町の里山の風景（左：長谷地区、右：田尻地区）

1.2 能勢町の里山の危機

豊かな里山資源をもつ能勢町の里山ですが、農家の減少や高齢化、そして林産物の需要の低下に伴い、管理や利用されずに放棄される里山が増加しています。

近年は獣害の顕在化も問題で、特に二ホンジカによる食害は生物多様性だけでなく、栗栽培や林業にも深刻な悪影響を及ぼします。

結果として、以前は当たり前のように受け継がれてきた里山資源が、次世代に継承されず失われていっています。

1.3 「能勢の里山活力創造戦略」とは

「能勢の里山活力創造戦略」とは、能勢町に関わる多様な立場の関係者により構成された「能勢の里山活力創造推進協議会」の主導のもと、里山資源の持つ課題を解決し、里山の「時代に合った」活かし方を創り出す「道標」として作成されたものです。

能勢の里山資源とは何か、資源を活用するための課題は何かをまとめた上で、未来に伝えたい能勢の里山像を定め、目標に到達するための施策を策定しました。

本戦略では、能勢町全域を対象としつつ、多様な主体や都市部との連携も視野に入れ、経済性を伴った持続的な地域づくりを推進するため、林業の再生活動である森林資源利活用や、経済性を伴ったグリーンツーリズムの振興を盛り込みます。

本戦略は、能勢町の上位計画である「能勢町第5次総合計画」と「第2次能勢町環境基本計画」で掲げられた目標を考慮した計画としています。

本戦略の位置づけを図1に示します。

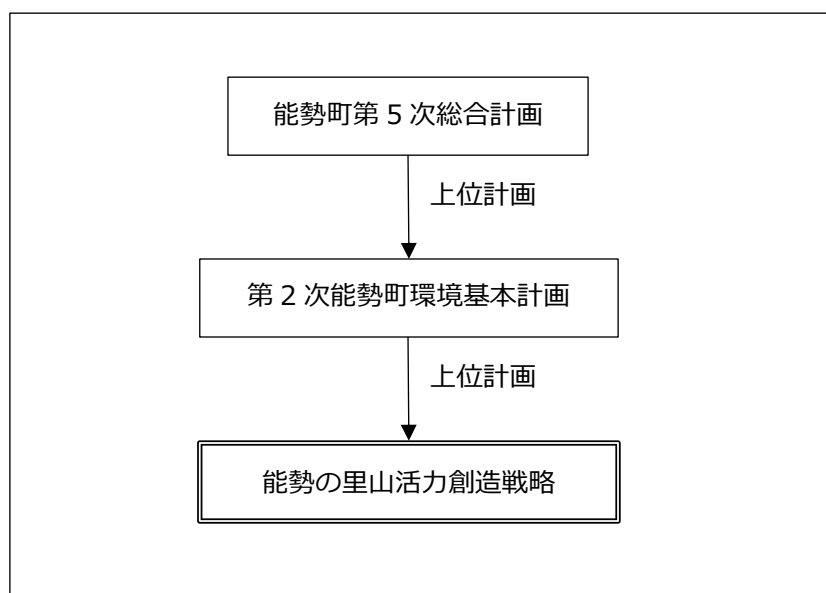


図 1 「能勢の里山活力創造戦略」の位置付け

2. 能勢町の地域特性 [現状把握と課題の抽出]

2.1. 能勢町の基本情報

(1) 能勢町の基本情報

- ・ 気候区分：内陸性気候、年平均気温 13.5℃（大阪市内 17.2℃）、年間降水量約 1,400mm
- ・ 地形的特徴：北摂山地に属し、町の四方は標高 500mから 800mのゆるやかな山々に囲まれており、全体的に高原状の地形的特徴を有している里山地形
- ・ 人口：10,264 人（2018 年 4 月 30 日 現在）
- ・ 主な生計源：農林業、卸売・小売業

(2) 能勢町の社会的・経済的立地

- ・ 大阪や京都など大都市近郊にあり、中世からこれらの大都市と密接に関係して発展してきました（図 2）。
- ・ 大粒で高品質な当地原産の「銀寄栗」、茶の湯用の高級炭である「菊炭」は、どちらも換金作物として高品質を志向し、大都市近郊の生産地であることもあってブランド形成に成功し、江戸時代から現在に至るまで、能勢の里山を代表する特産品となっています。

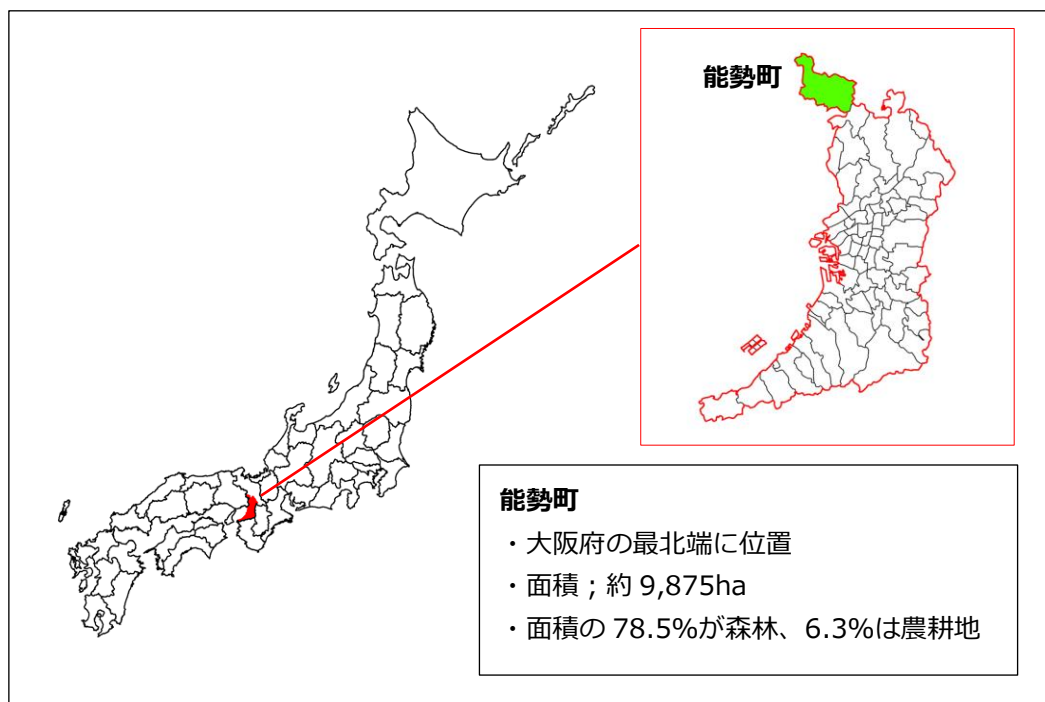


図 2 能勢町の位置

2.3. 能勢町の里山における自然環境

(1) 特徴

【里山の自然環境と生きもの】

- ・ 能勢の里山は、斜面地に分布するクリ林（くり山）とその背後にあるクヌギ・コナラ林、やアカマツ林、スギ・ヒノキ林等で構成される里山林、さらには棚田や麓の集落が一体となった独自の景観を形成しています。
- ・ 大都市近郊にもかかわらず、希少な生きものが多種生息し、大阪府のレッドリスト2014に掲載の絶滅危惧種の植物が66種（府内全体の約3割）、昆虫類が92種（府内全体の約7割）生育、生息しており、保全上極めて重要な地域となっています。
- ・ 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が、2011年に全国の665自治体（市町村）を対象にして調査した「全国の優れた生物多様性自治体ランキング」でも1位となるなど、国内でもトップクラスの生態系の豊かさを備えています。
- ・ 栗栽培のためのクリ林の下草刈りや、菊炭やシイタケのほだ木採取のためのクヌギ・コナラ林の萌芽更新など、「生業」を通じた里山資源の管理と利用によって今なお里山が維持されていることが特徴です。
- ・ 国の「重要里地里山」として、歌垣山や三草山、地黄湿地など、町内で3エリアが選定されています。
- ・ このような里山では、草地から落葉広葉樹林までの幅広い環境の植生がモザイク状に維持され、それぞれの環境に依存した多様な生きものが生息することができます（図3）。

【里山を使った生活と文化】

- ・ 電気や化石燃料に大きく頼らなくても、里山資源を賢く利用して生活する知恵と文化が、能勢には比較的近年までありました。
- ・ 能勢町は、他の地域よりも比較的近年まで里山資源を日常生活で利用してきたため、里山資源を利用した生活を知っている・覚えている方がいらっしゃいます。
- ・ 2018年現在で、能勢町で生まれ育った70代前後の方々は、小さい頃に親と共に、里山で狩猟をしたり、薪を作ったり、柴や木の実、キノコ類など、様々な林産物を使った経験を持つ方がほとんどのようです。
- ・ 今でも、里山の木々から薪を作り、その薪を使ってお風呂を沸かしている家も少なくありません。
- ・ さらに、日々の暮らしの中のちょっとした知恵として、木の枝で紐を作って柴を縛った、薪づくり、食べられる木の実、スノキの枝からでる水で喉の渇きを潤した等の話があります。
- ・ このように、里山資源を使ってきた「先人の知恵」が今なお残る地域です。
- ・ 上記のような生活はグリーンレジリエンスを活かすこと（自然資本を活用した社会資本整備のこと、詳細は3.4.（1）に記載。）に繋がります。

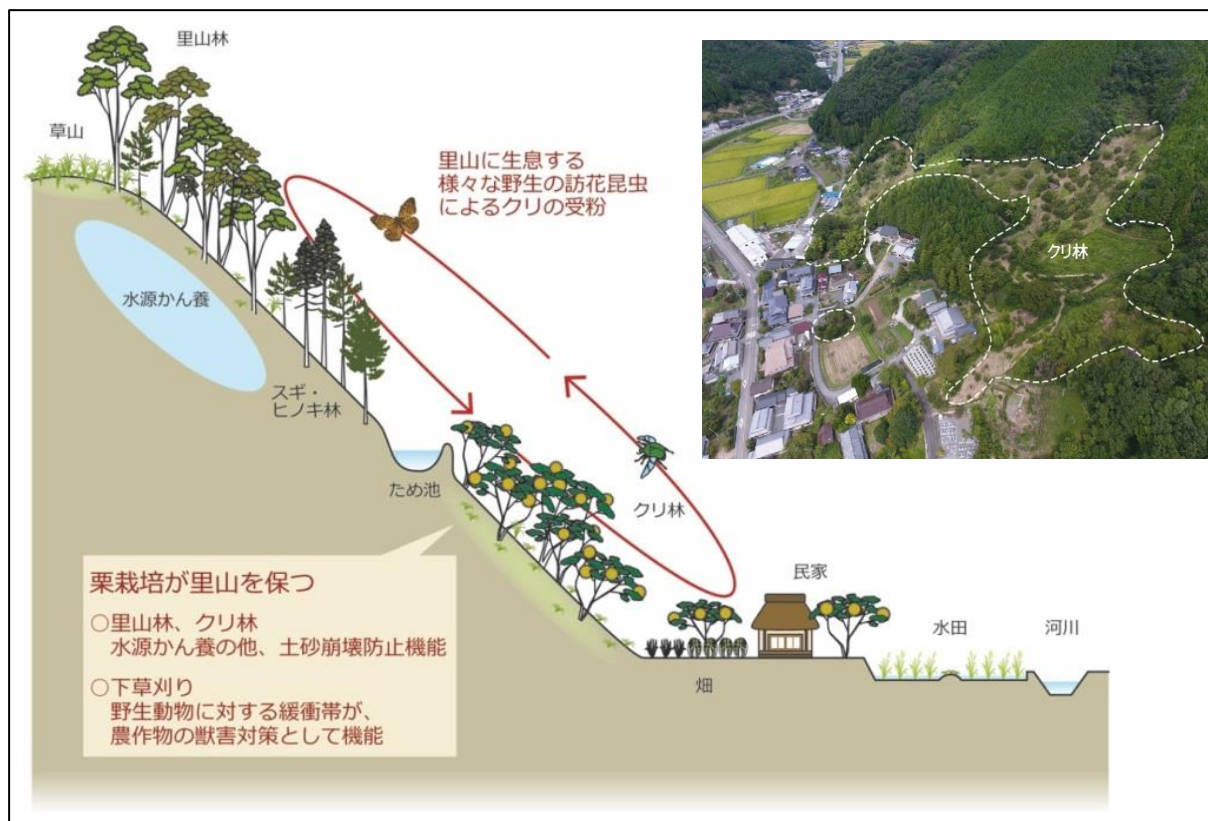


図 3 能勢の里山の模式図

◎コラム：栗栽培と生物多様性

- ・ 当地域の栗栽培の管理は、下草刈りを中心とし、あとは整枝・剪定などです。
- ・ 草が伸びると作業の邪魔になるため、クリ林内では田植え前と盆前後の年に2回ほどの下草刈りが行われ、豊かな草地が維持されます。
- ・ そうしたクリ林の草地環境と周辺のクヌギ林や農地が連続することで、林内と草地を行き来して利用する生きものなど、多様な生きものの生息空間が確保されています。



クリ林林床の草地（左）とクリ林での草刈りの様子（右）

【能勢町に生育する植物】

- ・ 当地域では、里山に生育する植物であり、能勢町の「町の花」であるササユリがクリ林やクヌギ・コナラ林の林床で見られるほか、ギフチョウの幼虫の餌となるミヤコアオイ、多数のスミレ類（アリアケスミレ、タチツボスミレ、コスミレ、スミレ、ニオイタチツボスミレ、ナガバタチツボスミレ、ツボスミレ、シハイスミレ）など、里山の草地を代表する野生植物が生育しています（写真 2）。



写真 2 能勢の里山で見られる植物
(左：ササユリ、右：ニオイタチツボスミレ)

【能勢町で見られる動物】

- ・ クリ林の周辺に広がるクヌギ・コナラ林を主体とした里山林では、オオクワガタをはじめとする様々な甲虫類や、ギフチョウ、オオムラサキ、ヒロオビミドリシジミなどの希少な蝶も数多く生息しています。大阪府に記録があるチョウ類約 100 種のうち、その 90%が能勢町に生息しています（写真 3）。
- ・ 田んぼや農業用のため池、河川などの水辺環境には、ダルマガエルやオオサンショウウオなどの両生類の他、タガメやミズカマキリといった水生昆虫など、数多くの希少種も確認されています（写真 4）。
- ・ 生態系の頂点に位置する猛禽類のオオタカも確認されているほか、タカ科のサシバやハチクマ、フクロウ科のアオバズクなど、希少な鳥類も数多く見られます（写真 5）。



写真 3 能勢町で見られるチョウ類（左：ヒロオビミドリシジミ、右：ウラナミアカシジミ）



写真 4 能勢町の水辺で見られる生きもの（左：オオサンショウウオ、右：タガメ）



写真 5 能勢町で見られる鳥類（左：サシバ、右：アオバズク）

◎コラム：クリ林と訪花昆虫の共生関係

- ・ クリの花は虫媒花であり、結実には、雌花に別の所から花粉を運んでくれる生きものが必要で、受粉を助けるポリネーターとなる昆虫の活動がクリの結実、ひいては収量に大きく関わります。
- ・ 豊かな昆虫類が生息する環境にある能勢町では、数多くの昆虫によるクリの花への訪花が確認されており、クリの受粉を助けていると考えられます。
- ・ クリの花を訪花する昆虫の中には、今では大阪府内で能勢町にしか生息していない非常に珍しいキマダラルリツバメ、そしてヒョウモンチョウの仲間のウラギンヒョウモンなど、希少な昆虫も確認されています。



クリの葉にとまるキマダラルリツバメ（左）とクリに吸蜜に来たウラギンヒョウモン（右）

【新たな自然環境を活かした動き】

- ・ 能勢町には、長谷の棚田や野間の大ケヤキ、剣尾山や自然歩道、銀寄栗、ボタン鍋など、グリーンツーリズム²（緑豊かな農山漁村でゆっくりと滞在し、訪れた地域の人々との交流を通じて、その自然、文化、生活、人々の魅力に触れ、農山漁村でさまざまな体験などを楽しむ余暇活動のこと）の訪問先となりうる歴史・文化・自然など地域資源が豊富に存在しています（写真 6）。
- ・ 2010 年 4 月に発刊された観光情報誌「おおさかのてっぺん」は、半年で販売部数が 8 千冊を超え、能勢町のもつ潜在的な魅力が改めて認識されました。



写真 6 能勢町におけるグリーンツーリズムの観光資源
（左：野間の大ケヤキ、右：長谷の棚田）

（２）脅威

【管理放棄による里山の自然環境の劣化】

- ・ 農家の減少や高齢化、そして林産物の需要の低下に伴い、管理や利用されずに放棄される里山が増加しています。
- ・ クリ林では、林床の草刈り行われなくなることによって藪のようになり、特徴的な草地生の植物や昆虫などが見られなくなります（写真 7）。
- ・ クヌギ・コナラ林では、木が伐採されないことで林内が暗くなり、明るい林内に生息・生育してきた生きものが見られなくなります。

² 農林水産省 グリーン・ツーリズム http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/gt.html



写真 7 管理放棄によって藪化したクリ林（左）と竹林化したクリ林（右）

【野生動物による被害の顕在化】

- ・ ニホンジカによる食害は草地を破壊し繋がり、生物多様性の劣化が懸念されます(写真 8)。
- ・ ニホンジカによって森林の林床植物が食害されると、土壌流出（エロージョン）を引き起こし、土砂崩れなどの災害の危険性が高まります。

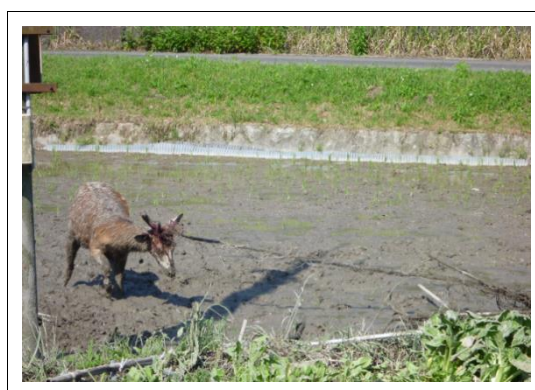


写真 8 人里に出現したニホンジカ

【里山資源の使った生活文化が継承されていない】

- ・ 以前は当たり前のように受け継がれてきた里山資源を使った生活文化が、次世代に継承されず失われていっています。

【能勢町民と里山との関わり合いの減少による里山資源の消失】

- ・ 能勢町民が里山を管理・利用する機会が減少することで里山が荒廃し、観光資源になりうる希少な生きもの、美しい景観などが消えていっています。
- ・ また生活文化の継承が途絶え、催し、お祭り等が消えつつあります。

【里山資源を活かし防災・減災する力（グリーンレジリエンス）の喪失】

- ・ 里山資源やそれを使った生活様式が失われることで、潜在的に里山が持っていた里山資源を活用した防災・減災の力（グリーンレジリエンス）※も低下、喪失します。

※ 例：里山林の木々で薪をつくり燃料調達、健全な森林保全による水源の維持や地滑りの抑制など。詳細は 3.4.（１）に記載。

2.4. 能勢町の里山における農林業

（１）特徴

【農林業】

- ・ 能勢町では、古くから米作を中心として農業を基幹産業として発展し、特産品である栗栽培に加え、水稻、露地野菜、肉用牛や乳用牛の畜産を中心に生計が営まれてきました。
- ・ 能勢町の町域面積 9,875ha うち、約 6.3%（626ha）が耕地となっています。
- ・ 里山におけるクヌギ・コナラ林では、近年その伐採量は減少しているものの、菊炭用の原木やしいたけのほだ木が調達されています。その他林産物としてたけのこやシイタケなどがあります。最近では、薪ストーブ用の薪の生産が行われています（写真 9）。
- ・ アカマツ林では、入札によるマツタケの生産活動が活発に行われてきましたが、現在は縮小傾向にあります。



写真 9 能勢町の主な林産物（左：シイタケ栽培用のほだ木、右：薪ストーブ用の薪）

【栗栽培】

- ・ 能勢町は「銀寄」発祥の地とされます。銀寄は国内のクリ生産の 15%を占める主要な品種となっており、大きくてツヤがあり、甘みが強いのが特徴です。日本の栽培栗のルーツの一つである品種であり、能勢町を代表する特産物の一つです。(写真 10)。
- ・ 2015 年世界農林業センサスでは、当地域の農家数 996 戸のうち、栗栽培農家は 174 戸と全体の 17.4%となっています。
- ・ クリ林を持たない農家であっても、畑や家の周りに栗の樹を植え、日々の暮らしの中で草刈りや剪定作業が行われているため、統計上現れない栗を栽培する農家も多く存在します。
- ・ 最近では、都市部の和菓子屋が、当地域のクリ林を借りて自ら苗木の植樹から下草刈りなどの管理作業を行い、和菓子の原材料を直接調達するなど、6次産業化の取り組みも見られます。



写真 10 銀寄栗（左）と 500 円玉との比較（右）

【製炭】

- ・ クリ林の背後に広がるクヌギ林では、茶道において江戸時代から重宝されてきた「菊炭」の原木（クヌギの小、中径木）の収穫が行われています。
- ・ 菊炭は、切り口が菊の花のように均一に割れ目があり、燃え尽きた後にも白い炭がそのままの形で残るなど風情があり、現在でも高級炭として京都の茶道家元で用いられるほか、茶席には欠かせない一品として広く用いられています。
- ・ 菊炭の産地である能勢町や近隣の市町村では、原木となるクヌギを一定の高さで伐採し、その株を台木にして、台木から数本芽生えてくるクヌギの枝木を約7年の期間育てて、原木用に伐採する育林技術が伝承されてきています。こうした育林技術により生育しているクヌギは独特な形状となり、「台場（だいば）クヌギ」と呼ばれています。
- ・ 台場クヌギが立ち並ぶ林は、クリ林と合わせ、能勢を特徴づける景観を創出しています（写真 11）。



写真 11 能勢町で生産される菊炭（左）と台場クヌギ（右）

【農産物や林産物の販売施設の設置】

- ・ 2000 年に、能勢の地場産野菜等の直売所として「能勢町観光物産センター」が開設し、その後 2001 年に「道の駅 能勢くりの郷」として登録を受け、2017 年度には来場者（レジ通過者数）約 23 万人、農産物、農産加工品などの総売り上げが、約 4 億 5 千万円を記録しています（写真 12）。
- ・ 道の駅が開設されたことで、これまでの JA を通じた共同出荷以外に、消費者により身近な販売機会も提供することが可能となり、能勢の農産物（能勢くり等）のブランド発信に大きく寄与しています。



写真 12 道の駅 能勢くりの郷（能勢町観光物産センター）（左）と銀寄栗の加工品（右）

◎コラム：クリ林の多面的機能

- ・ 能勢町では、集落・民家に近い裏山の斜面地を利用した栗栽培が行われていますが、林床の下草刈りによって農地との境界付近に野生鳥獣との緩衝帯となる空間が形成され、野生鳥獣の人里への接近を抑えてきました。
- ・ 斜面地に植えられたクリの木は、クリの特徴でもある深根性の根により、土砂の崩壊や表土の流出を抑制する機能も有します。
- ・ 能勢の里山は、地域の人々が生活の糧を得るための重要な場でしたが、あわせて収穫対象の産物に応じた作業が行われてきたことで、様々な環境が創出され、様々な生きものの生息に適した環境が維持されてきました。



集落裏山の山裾に広がるクリ林（左）と民家に隣接するクリ林（右）

(2) 脅威

【農家数の減少による農地の管理放棄】

- ・ 能勢町の人口減少、少子高齢化の進行が栗栽培や里山の維持管理にとって大きな脅威となっています。
- ・ 加えて、農業経営での採算性の低さにより、新規営農者の確保が難しいのが現状です。
- ・ 1990 年に 1,343 戸あった農家数が、2015 年では 996 戸になり、約 25%減少しています。
- ・ 上記の状況と比例して各農作物の栽培面積も減少しています。例えば栗栽培面積は、1990 年の 246ha から 2005 年には 185ha と、約 25%減少しています。
- ・ 一方、人口に占める 65 歳以上の割合の推移で見ると、2000 年は 18.62%であったのが、2018 年では 37.42%となり、住民の高齢化が顕著になっています。
- ・ 人口減少、少子高齢化の進行が今後も続くと見込まれる中で、農業や里山の維持管理の一層の減退が懸念されます。

【野生動物による被害の顕在化】

- ・ ニホンジカやイノシシが増加して人里にもよく出没し、農産物への被害が顕在化しています。
- ・ クリ林では、ニホンジカやイノシシによって落果した栗や新植苗の食害も多く、大きな脅威となっています。
- ・ 林業では、スギやヒノキに対する剥皮被害、林床への食害とそれに伴う土壌流出等、植林地の荒廃を引き起こしています。

【里山資源の需要の低下に伴う利用の減退】

- ・ 薪やシイタケのほだ木として利用されてきたクヌギやコナラの需要や、材木として利用されてきたスギやヒノキの需要の低下に伴い、里山の森林が管理・利用されず放棄され、荒廃が進んでいます。

2.5. まとめ（能勢町の活かしたい「里山資源」と「課題」）

前述の能勢町の里山の特徴や課題をまとめ、「活かしたい里山資源」と「資源の活用を妨げる課題」として整理しました。

○ 活かしたい里山資源

資源 1：里山資源を活かした災害からの回復力・復元力の高さ（グリーンレジリエンス）

- ・ 災害時でも生活を維持できる豊富な里山資源と、資源を使うための「先人の知恵」が残っています。

資源 2：今なお人々に利用され、生物多様性豊かな里山

- ・ 生業を通じた里山資源の管理と利用による「活かした里山」が現存しています。
- ・ 大都市近郊にもかかわらず、希少な生きものが多数生育・生息し、国内でもトップクラスの豊かな生態系を備える里山があります。

資源 3：豊富な農産物や林産物

- ・ 能勢の里山を代表する産物である「銀寄」や、林産物が豊富に存在しています。

資源 4：都市近郊の立地とグリーンツーリズムの要素となる地域資源

- ・ 大阪市内から車で 1 時間弱でアクセスでき、都市住民が観光や環境保全活動等に参加しやすい立地です。
- ・ グリーンツーリズム等での要素になりうる訪問先や、里山資源を活かした料理、文化などが豊富にあります。

○ 資源の活用を妨げる課題

課題 1：農地や林地の管理放棄地の増加 ⇒ 資源 1、2、3 に影響

- ・ 農家や林業家の減少・高齢化、林産物の需要低下により、管理放棄される里山が増加しています。

課題 2：獣害の顕在化 ⇒ 資源 1、2、3 に影響

- ・ ニホンジカやイノシシによる、落果したクリの実や苗木への被害が増加しています。
- ・ クリ林やクヌギ・コナラ林の林床への食害により、多くの生きものが生育・生息する草地が減少しています。

課題 3：里山の資源を使う生活文化が次世代に継承されていない ⇒ 資源 1～4 に影響

- ・ 里山資源の利用法（銀寄栽培や木材生産の技術、日々の生活のちょっとした知恵等）が継承されていません。

課題 4：グリーンツーリズムを推進する体制の未整備 ⇒ 資源 4 に影響

- ・ 豊かな自然資源や、都市近郊であるポテンシャルを産業に活かしていません。

3. 「能勢の里山活力創造戦略」の内容

3.1. 戦略策定と実行に向けての考え方

前述のまとめを踏まえ、本戦略を策定・実行するための3つの考え方を以下に整理しました。考え方の模式図を図4に示します。

① 戦略の目標：未来に伝えたい能勢の里山像

「活かすべき里山資源」として挙げたグリーンレジリエンス、生物多様性、農林業、グリーンツーリズムの観点から、本戦略で目指す「目標」として能勢町の里山の将来像をまとめました。

② 目標の達成に向けた施策の策定

①で設定した目標に向けて、現在取り組むべき行動をまとめ、目標達成に向けた施策を策定しました。

③ 里山資源利活用のための区域と重点施策の設定

②の施策を効果的に実施するために、能勢町をいくつかの区域に分け、各区域に存在する里山資源を整理し、里山資源と関連する施策を重点的に取り組む施策として設定しました。

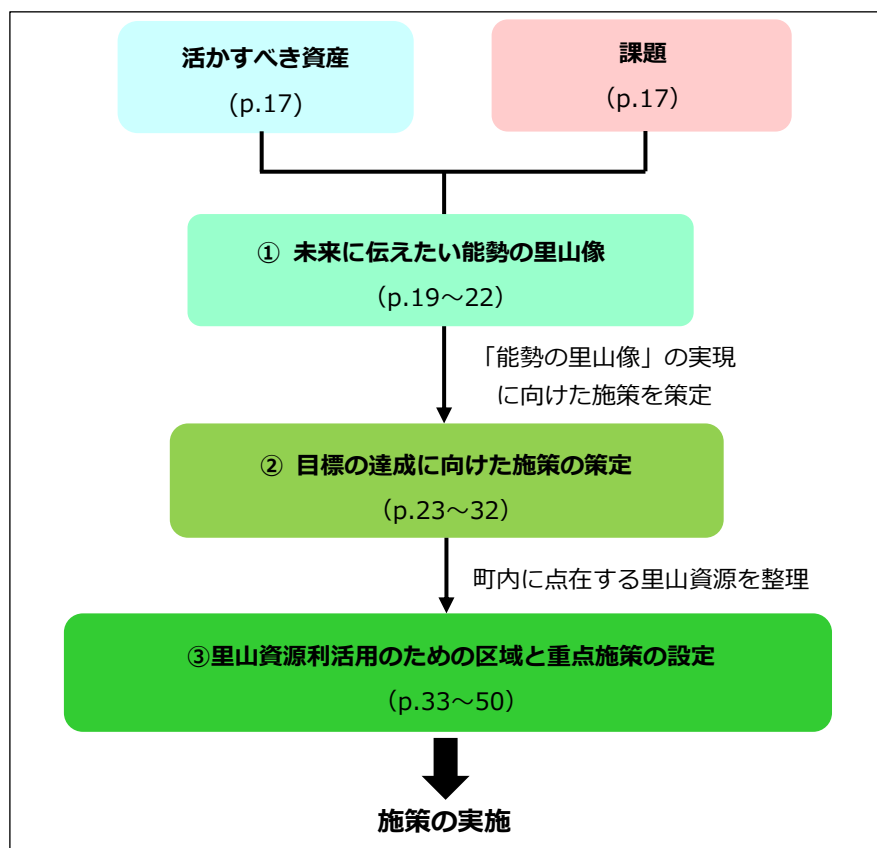


図4 戦略策定プロセスの模式図

3.2. 戦略の目標

前述した「活かしたい里山資源」を活かし、「資源の活用を妨げる課題」を解決した「未来に伝えたい能勢の里山像」を、本戦略を通じて目指していく目標としました。

具体的には、「活かすべき里山資源」として挙げたグリーンレジリエンス、生物多様性、農林業、グリーンツーリズムの観点から、目標 1～4 としてまとめました。

これらの目標は、戦略策定後から概ね 10 年後までに実現させることを目指します。

○ 戦略の目標：未来に伝えたい能勢の里山像（概ね 10 年後の実現を目指す）

- ・ 自然災害に対するレジリエンスの維持・向上
⇒ **目標 1『グリーンレジリエンスを活かした災害に強いまち』**
- ・ 生物多様性の保全
⇒ **目標 2『都市近郊にあって生物多様性の高いまち』**
- ・ 能勢町の産業の活性化
⇒ **目標 3『活力ある農林業のまち』**
- ・ 里山資源の継承と新産業（グリーンツーリズム）の創出
⇒ **目標 4『里山資源の魅力を発信するまち』**



写真 13 農作業を体験する子どもたち

（１）目標 1 『グリーンレジリエンスを活かした災害に強いまち』

- 1) 里山資源が適切に維持管理され、町民の誰もが里山資源の使いかたを理解し、災害時には里山資源を用いて、ライフライン等の被害からいち早く回復できる体制が整っています。
- 2) 都市部での災害時に、里山資源を用いて都市住民の生活のバックアップを担えるような体制が整っている。具体的には、①常に山に手が入り、②災害時に利用できる薪等が常時貯蓄され、水源も確保されており、③それらを使って避難生活が送れる施設があり、④使い方を知っている人が町内に住んでいる。

【グリーンレジリエンスとは】

地域の自然や地形など、自然が発揮する機能やもたらす恵みを賢く活用し、地域の自然の豊かさを向上させることで、相乗的に災害による人命や財産への影響を軽減させる、「自然資本を活用した社会資本整備」を進める考え方です。

グリーンレジリエンスの考え方を 6 つにまとめ、図 5 に示します。

1 ブルー・ストック 「水を貯めて、自然の水を活用する」  断水時でもトイレや生活用水を利用できるように、雨水を貯めたり、沢の水、ため池などの位置を確認して、確保しておきます。	2 グリーン・ストック 「自然資源を食料や燃料として活用する」  身の回りの田畑にある作物をストックしておいたり、林の木々を薪にして非常用燃料として確保しておきます。
3 グリーン・リダクション 「自然資源を活用して減災する」  防火林や森林の持つ雨水貯留機能を上手く活用した減災の仕組みをつくります。	4 レジリエンス・ネットワーク 「自然資源が活用しやすくなる環境を作る」  自然資源を活用するためには、自然資源のことを理解し、資源を維持する人々の連携や拠点の確保などが必要です。
5 レジリエンス・テクノロジー 「グリーンレジリエンスを支える技術」  自然資源の有効性を高めるため、現代のテクノロジーを導入します。	6 サバイバルトレーニング 「自然資源を活用するための教育・訓練」  自然資源の大切さを理解するための環境教育や、災害時に自然資源を活用するための防災教育・訓練を行い、普段から身に付けておきます。

図 5 グリーンレジリエンスの6つの考え方

(2) 目標 2 『都市近郊にあって生物多様性の高いまち』

- 1) 里山資源の利用が活性化し、管理放棄されたクリ林や台場クヌギ林等の里山に再び人の手が入り、生物多様性の豊かな里山が町全体に広がっています。
- 2) 大都市近郊にあって生物多様性が豊かである能勢町の里山の重要性が広く認知され、近隣都市の住民が、生きものとの触れ合いやグリーンツーリズムの場として町に訪れています。

(3) 目標 3 『活力ある農林業のまち』

- 1) 能勢の農林業と豊かな生物多様性はお互いに関係していて、大きな意義と価値があることを町民皆が理解し、能勢の農林業に誇りを持っています。
- 2) 植林を含む里山林が適切かつ健全に維持管理され、そこから農林産物を収穫することが、能勢町民の生業として成り立っています。
- 3) 農林業の伝統的な知恵や栽培技術が次世代に引き継がれています。
- 4) 林業を生業とする新しい試み（木の駅等）が実施され、林業者の所得向上に寄与しています。

(4) 目標 4 『里山資源の魅力を発信するまち』

- 1) くり山を中心とした「能勢らしい」里山風景が保全されています。
- 2) 里山資源を活用した生活文化が次世代に継承されています。
- 3) 里山資源を活かした新しい産業（グリーンツーリズム等）を通じて、能勢町の里山資源の魅力が広く発信され、都市住民等が能勢の里山資源に注目し、経済性を伴った里山資源の利活用に繋がっている。

3.4. 目標の達成に向けた施策の策定

目標とした「未来に伝えたい能勢の里山像」の実現に向けて、現在取り組むべき行動をまとめ、目標達成に向けた施策を策定しました。

（１）施策１：グリーンレジリエンスの向上（災害に強いまちづくり）

目標１「グリーンレジリエンスを活かした災害に強いまち」の実現に向けて、以下の施策を実行します。

また下記の施策は、災害時における都市（特にフレンドシップ協定を締結している吹田市）住民の生活のバックアップ体制の構築も目指すものです。

■ 施策 1-1：災害時や避難時に使用できる水源地の把握・維持

【目的】

- ・ 災害時の避難場所の周辺において、生活に利用できる水源の状況・位置を把握し、常時利用できる状態に維持する事。

【内容】

- ・ 避難場所の周辺における井戸や沢、湧き水といった水源地の位置を把握します。
- ・ 掃除や草刈り等の手入れを行い、緊急時に使用できる状態を維持します。



能勢町内にある井戸



人里近くの沢

■ 施策 1-2 : 薪ストーブの導入や「木の駅」と連動した薪備蓄の推進

【目的】

- ・ 災害時も利用できる薪ストーブを各避難所や一般家庭に設置し、燃料となる薪の確保も合わせて行い、能勢町全体の災害対応能力を向上させる事。

【内容】

- ・ 各避難所において薪ストーブの導入や、「木の駅」（詳細は施策 3-2 に記載）と連動した薪の備蓄を進めます。また、一般家庭においても薪ストーブの導入および薪の備蓄を推奨します。



薪ストーブ



備蓄された薪

■ 施策 1-3 : 災害時に里山資源を活用するための地域コミュニティの拡充

【目的】

- ・ 消防団や自治体ごとに、里山資源を活用した防災・減災に関して理解して共有し、災害時の連携体制を構築する事。

【内容】

- ・ 消防団や自治会などで、施策 1-1 で述べた「災害・避難時水源マップ」（仮称）を用いて地域の水源の位置を把握してもらう、施策 1-2 で述べた薪ストーブの使い方を把握してもらう等、緊急時における避難住民の指導体制を構築します。



レジリエンス・ネットワーク構築のイメージ

■ 施策 1-4 : 里山資源を活用した防災訓練の実施

【目的】

- ・ 災害時における能勢町民の対応能力の向上。

【内容】

- ・ 井戸水や薪などを使った「防災キャンプ」を実際に体験してもらい、災害時における町民の対応能力の向上を目指します。



防災キャンプのイメージ



薪づくり

（２）施策２：里山資源を支える生物多様性の保全

目標２「都市近郊にあって生物多様性の高いまち」の達成に向けて、以下の施策を実行します。

■ 施策２-１：生きものの調査の実施と情報整理および「能勢の生きもののマップ」の作成

【目的】

- ・ 生物多様性保全に向けた希少な生きものや優れた自然環境の現況把握
- ・ 能勢町民や都市住民に向けた能勢町の生物多様性についての普及啓発

【内容】

- ・ 三草山や歌垣山、地黄湿地等、能勢町内でも特に生物多様性が豊かな地域（ホットスポット）を対象に、自然環境と生きものの生息・生育状況についての調査を行い、得られた情報を整理します。
- ・ 収集したデータを活用して、能勢町内で見られる希少な生きものや、その生息・生育場所、特筆すべき自然環境等を分かりやすく伝える「能勢の生きもののマップ」（仮称）を作成します。



三草山



地黄湿地

(3) 施策3：農林業の活性化

目標3「活力ある農林業のまち」の達成に向けて、以下の施策を実行します。

■ 施策3-1：クリ林の活性化を通じた休耕地の有効利用

【目的】

- ・ 栗栽培農家の労務の低減化および、町内の管理の担い手がないクリ林や遊休農地の有効利用。
- ・ 多様な生きものの生息・生育空間となっているクリ林・里山林についての普及啓発および維持管理活動への参加促進。

【内容】

- ・ 町内外から意欲ある新規栗栽培参入者を呼び込み、管理の担い手がないクリ林で栗栽培活動を代理してもらう仕組みづくりを進めます。
- ・ 遊休化の恐れのある農地を、銀寄のクリ林として整備します。
- ・ 下草刈りや除伐等の管理が多様な生きものの生息・生育環境の形成につながる事を、栗栽培農家の方へ向けて普及啓発する「生きものと共生する能勢の栗づくり宣言」制度を推進します。



新規参入者へ向けた栗栽培の講習会

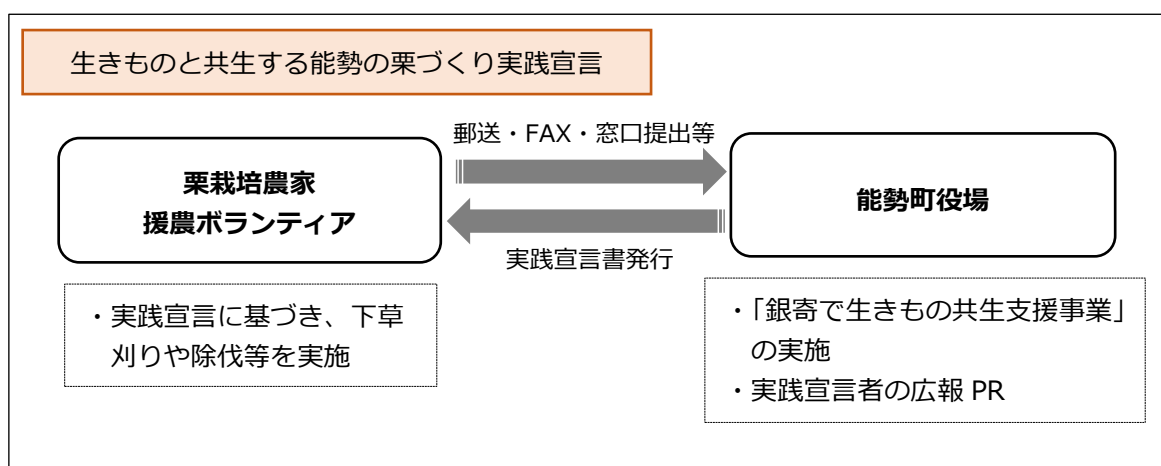


図6 「生きものと共生する能勢の栗づくり宣言」模式図

■ 施策 3-2：能勢材の利用拡大

【目的】

- ・ 未利用材の継続的な需要の創出と、計画的な伐採・搬出・利用の促進。
- ・ 林地残材の有効活用の仕組み作りと、効率的な収集体制の構築（木の駅）。
- ・ 防災・減災の為に森林機能向上（施策 1-4 参照）や、木材利用を通じた森林の手入れの推進。

【内容】

- ・ 能勢の里山資源について、未利用材を薪や資材、紙製品・文具への利用用途につなげる「里山資源の木質バイオマス利用促進事業」を位置づけ、クヌギやコナラ、スギ、ヒノキ等の未利用材の計画的な伐採・搬出・利用を進めます。
- ・ 特に人工林の林地残材や広葉樹等の未利用材を収集し有効活用する仕組みとして、「木の駅」を立ち上げます。
- ・ 山の手入れにより発生した上記のような木材を「木の駅」（能勢町が確保する土場）に持ち込むことで、持ち込まれた未利用材の量に応じて、一定金額で買い取る仕組みを構築します。
- ・ 都市部と連携し、都市部への計画的かつ安定的な木材やチップの供給体制を構築することで、公共施設での木材利用や都市域での能勢産材を原材料とした紙製品や文具等の調達を図り、未利用材の継続的な利用を進めます。

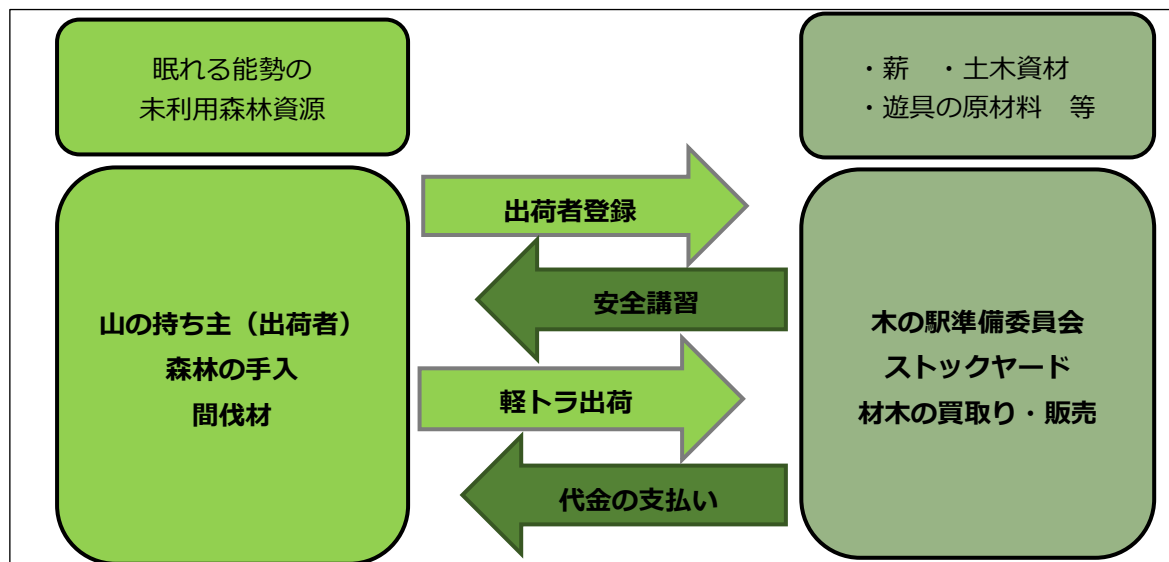


図 7 「能勢 木の駅プロジェクト」 概念図

■ 施策 3-3 : 獣害対策の強化

【目的】

- ・ 対策コストの省力化につながる効果的な野生動物による食害被害対策の普及。

【内容】

- ・ 新植苗木を局所的に保護することに効果のある合成樹脂製サークルネットの設置を町の方針として明確化し、合わせてネットの設置への助成も行うことで、栗栽培農家や援農ボランティアの方々の新植活動を促進します。



合成樹脂製のサークルネット

(4) 施策4：里山資源の魅力発信

目標4「里山資源の魅力を発信するまち」の達成に向けて、以下の施策を実行します。

■ 施策4-1：里山資源およびその利活用法に関する情報の記録・整理

【目的】

- ・ 生活の変化に伴い、現在失われて行っている里山資源の利用法、里山暮らしの生活文化等、里山資源とその利活用法に関する情報の収集および次世代への伝承。

【内容】

- ・ かつて能勢町の里山環境や生きもの、里山資源の利用法、里山暮らしの知恵等、能勢の里山資源とその利活用法に関する情報を収集し、記録して整理します。
- ・ 整理した情報は次世代に伝えるべきものとして、「(5) 施策の推進のために」に記す「能勢の里山資源を受け継ぐ人材育成」において活用します。

■ 施策4-2：グリーンツーリズムの振興

【目的】

- ・ 里山資源を活かした新しい産業の創出。
- ・ 主に都市住民に対して、能勢町の豊かな生物多様性と、農林業や暮らしとの関係を伝える機会の創出。

【内容】

- ・ グリーンツーリズムのモデルツアーの企画を行い、実施します。



モデルツアーのイメージ



モデルツアーの候補地（真如寺）

（５）施策の推進のために

（１）～（４）で定めた４つの施策を推進するためには、生物多様性に関わる様々なニーズに対応する、多様な主体が関わる組織・体制が必要です。そのために「（仮称）能勢地域自然資源開発センター」の設立を目指します。

このセンターは大きく分けて４つの機能を持ち、施策の推進に向けて中心的な役割を果たします。特に施策の実行にあたっては、関係する各主体と協力・連携しながら取り組みます。

さらに、施策を実行する中で都市住民と連携し、能勢の里山資源を活用した経済的にうるおう仕組みづくりを目指します。

■ 「（仮称）能勢地域自然資源開発センター」のイメージ

【本センターの機能】（図 8 に模式図を記載）

- ・ 機能１：戦略で定めた施策の実行
⇒ 関係する各主体（能勢町や大阪府、森林組合等）と連携し、各施策を推進します。
- ・ 機能２：里山資源を受け継ぐ人材の育成
⇒ 能勢町の里山資源とその活用について理解し、各施策の直接の担い手となる人材を育成します。
- ・ 機能３：町内外へ向けた情報発信
⇒ 能勢町の里山の魅力や、グリーンツーリズムや特産品などを、様々な広報媒体を使って、能勢町民を含む府民に対し広く情報発信します。また、企業にとってのCSRやSDGsの推進というニーズに対応して、取り組みのメニューを検討および提示できる組織を目指します。
- ・ 機能４：都市住民との連携で経済的にうるおう仕組みづくり
⇒ フレンドシップ協定や環境省の公募事業である「地域循環共生圏構築検討事業」による、能勢町と吹田市との連携も念頭に置き、能勢町と都市住民との交流やニーズを活用して、施策を推進しつつ、里山資源に関わる人が経済的にうるおう仕組みづくりを目指します。

（仕組みづくりの例）

- ・ 「生きものマップ」や「防災キャンプ」等を通じ、能勢町の生物多様性やグリーンレジリエンスの重要性を普及啓発
- ・ クリ林の保全活動や未利用材利用への参加・協力を推進
- ・ 上記を通じて、都市住民が能勢の農作物や林産物を購入したり、グリーンツーリズムを選択するなど、里山資源への都市住民の需要を掘り起こします。

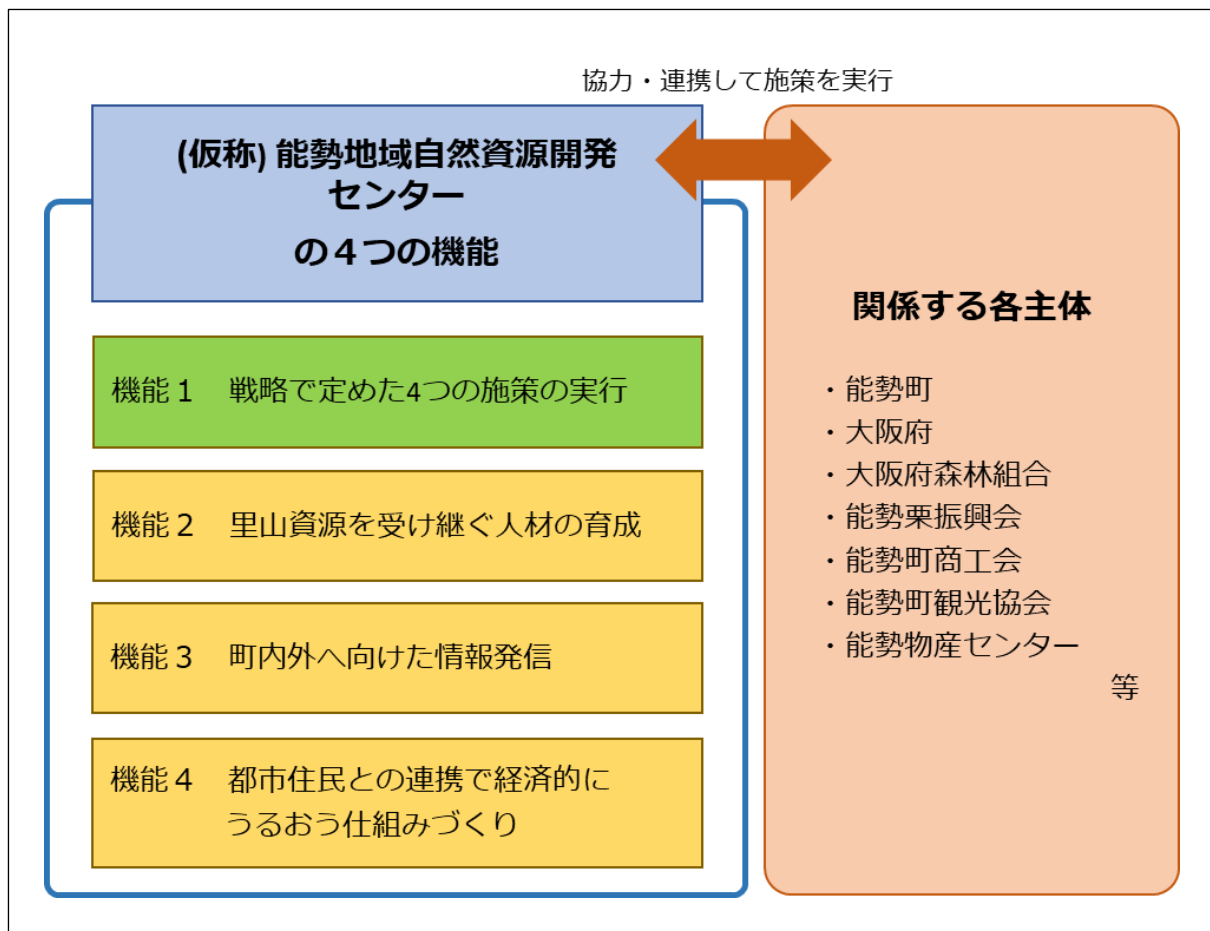


図 8 「(仮称) 能勢地域自然資源開発センター」の機能イメージ

3.5. 里山資源利活用のための地区と重点施策の設定

能勢町の各地区にある特徴的な里山資源を整理し、施策内容と資源の関係性から、重点的に取り組むべき施策を地区ごとに選定しました。

（１）能勢町全域を対象とする重点施策

グリーンレジリエンスの向上（災害に強いまちづくり）や獣害対策、里山資源に関する除法収集に関しては、目標や施策の性質上、町全域で取り組んでいく必要があるため、特定の地区ではなく町全域を計画区域としました。

表 1 に町全域を計画区域とする施策とその理由を示します。

表 1 町全域を計画区域とする施策とその理由

施策名		町全域を計画区域とする理由
施策 1 グリーンレジリエンスの向上(災害に強いまちづくり)		
施策 1-1	災害時や避難時に使用できる水源地の把握・維持	町全域で「自然資本を活用した社会資本整備」を進め、災害に強いまちづくりを目指すものであるため。
施策 1-2	薪ストーブの導入や「木の駅」と連動した薪備蓄の推進	
施策 1-3	災害時に里山資源を活用するための地域コミュニティ	
施策 1-4	里山資源を活用した防災訓練の向上	
施策 3 農林業の活性化		
施策 3-3	獣害対策の強化	獣害は町全域で顕在化しており、町全域で対策を強化していく必要があるため。
施策 4 里山資源の魅力発信		
施策 4-1	里山資源およびその利活用法に関する情報の記録・整理	里山資源に関する情報は町全域に散在しており、地区にとられず全域から情報収集する必要があるため。

（２）地区ごとの特徴的な里山資源と重点施策

地区ごとに存在する特徴的な里山資源を以下にまとめました。「●」は里山資源を、「・」は里山資源ではありませんが、本戦略において重要な施設（グリーンツーリズムの訪問先となる等）を指します。

各地区に存在する特徴的な里山資源と施策の関係を表 2 に、各地区の特徴的な里山資源の図を図 9～図 15 に示します。

【天王地区：環境と生態系の保全再生エリア】

天王地区の特徴的な里山資源

- 天王峠のモミ・コナラ林（環境省 特定植物群落）
- 生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）
- 天王のアカガシ（大阪府天然記念物）
- 能勢町天王・上山辺、剣尾山（大阪府生物多様性ホットスポット）
- 天王川 オオサンショウウオの生息地

重点施策

- ⇒ 施策 2-1：生きもの調査の実施と情報整理および「能勢の生きものマップ」の作成
- ⇒ 施策 4-2：グリーンツーリズムの振興

【岐尼地区：棚田と三草山を中心とした里地里山保全エリア】

岐尼地区の特徴的な里山資源

- 長谷の棚田（農林水産省 棚田百選）
- 三草山のナラガシワ林（環境省 特定植物群落）
- 生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）
- 三草山（大阪府生物多様性ホットスポット、大阪府緑地環境保全地域）
- 里山林を利用したシイタケ栽培用の原木栽培
- ゼフィルスの森
- 八坂神社のシイ（大阪府天然記念物）
- ・ 能勢町観光物産センター
- ・ 能勢温泉や汐の湯温泉といった温泉施設
- ・ 行者山 漁業組合のマス釣り

重点施策

- ⇒ 施策 2-1：生きもの調査の実施と情報整理および「能勢の生きものマップ」の作成
- ⇒ 施策 3-2：能勢材の利用拡大
- ⇒ 施策 4-2：グリーンツーリズムの振興

【久佐々地区：自然を親しむレクリエーションエリア】

久佐々地区の特徴的な里山資源

- 生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）
- 自然アクティビティ 冒険の森 in のせ
- 大阪府森林組合を中心とした里山ワークショップ
 - ・ 浄るりシアター

重点施策

- ⇒ 施策 3-2：能勢材の利用拡大
- ⇒ 施策 4-2：グリーンツーリズムの振興

【歌垣地区：銀寄保全再生エリア】

歌垣地区の特徴的な里山資源

- 生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）
- 銀寄ぐり原木母樹園（銀寄発祥の地）
- くり林再生プロジェクトの実施場所
- ギフチョウ、キマダラルリツバメ等の希少なチョウ類や、ハチクマ等の猛禽類の生息地
 - ・ 倉垣天満宮のイチョウ（大阪府天然記念物）

重点施策

- ⇒ 施策 2-1：生きもの調査の実施と情報整理および「能勢の生きものマップ」の作成
- ⇒ 施策 3-2：能勢材の利用拡大
- ⇒ 施策 4-2：グリーンツーリズムの振興

【田尻地区：二次林を中心とした里山再生エリア】

田尻地区の特徴的な里山資源

- 生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）
- 里山資源の産物「三白三黒」の地
 - ・ 田尻農産（直売所）

重点施策

- ⇒ 施策 3-2：能勢材の利用拡大

【東郷地区：歴史・文化エリア】

東郷地区の特徴的な里山資源

- 能勢妙見山のブナ林（環境省 特定植物群落）
- 野間の大ケヤキ（国指定天然記念物）、アオバズク、ケヤキ資料館
- 生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）
- 地黄湿地（大阪府生物多様性ホットスポット、大阪府緑地環境保全地域）
- 妙見山（大阪府生物多様性ホットスポット、大阪府緑地環境保全地域）
- ・ 能勢ケヤキの里（直売所）
- ・ 野間神社、清普寺、地黄城跡、真如寺等の歴史的遺産

重点施策

- ⇒ 施策 2-1：生きもの調査の実施と情報整理および「能勢の生きものマップ」の作成
- ⇒ 施策 4-2：グリーンツーリズムの振興

表 2 地区ごとの里山資源と施策の関係

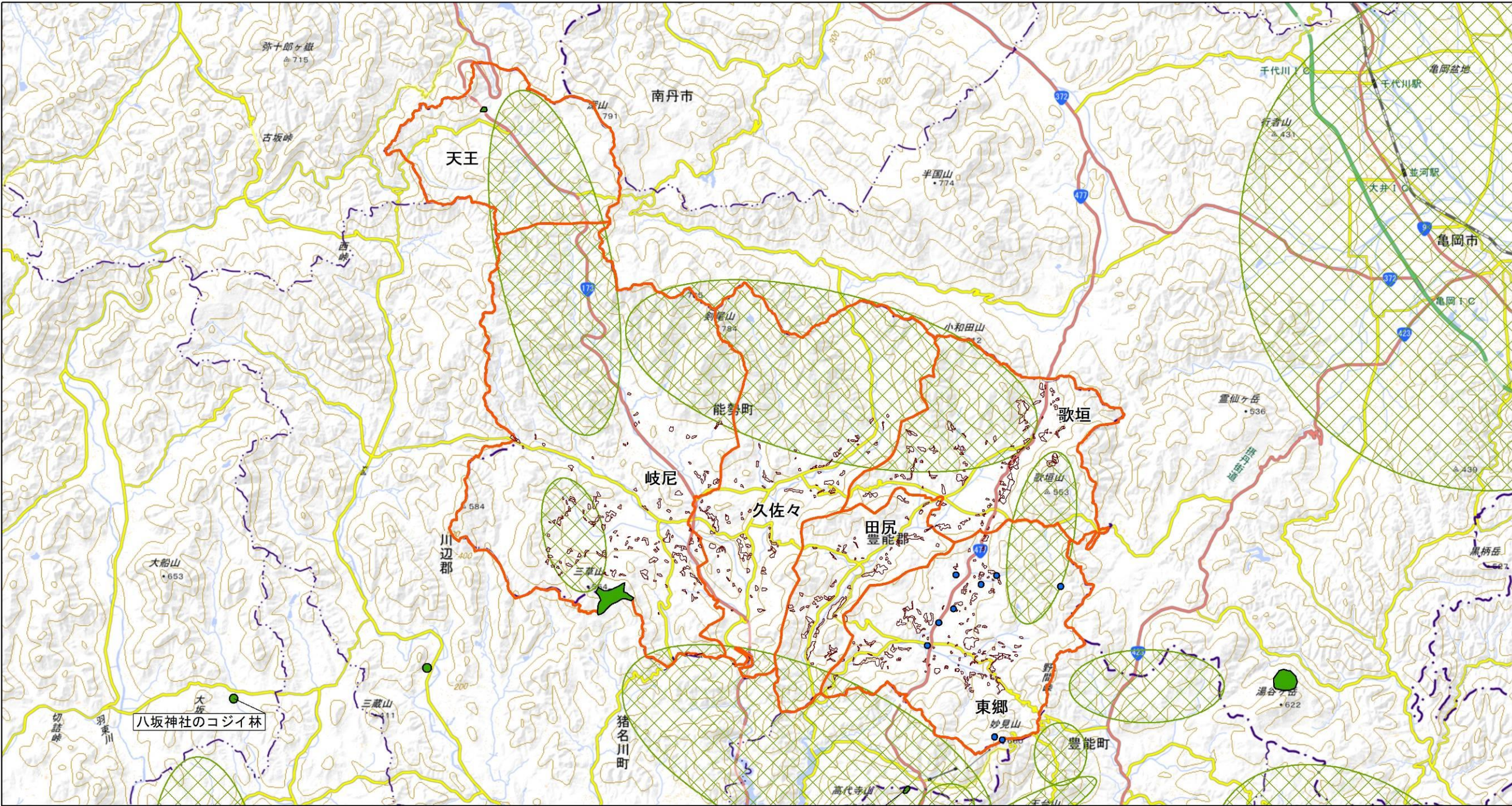
地区	特徴的な里山資源※3	里山資源と関係性が強い施策				重点 施策※4
		施策2	施策3		施策4	
		2-1	3-1	3-2	4-2	
天王地区：環境と生態系の保全再生エリア						
	天王峠のモミ・コナラ林（環境省 特定植物群落）	●				2-1
	生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）	●				
	天王のアカガシ（大阪府天然記念物）	●			●	
	能勢町天王・上山辺、剣尾山（大阪府生物多様性ホットスポット）	●			●	
	天王川 オオサンショウウオの生息地	●				
岐尼地区：棚田と三草山を中心とした里地里山保全エリア						
	三草山のナラガシワ林（環境省 特定植物群落）	●				2-1 3-2 4-2
	生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）	●				
	長谷の棚田（農林水産省 棚田百選）	●			●	
	八坂神社のシイ（大阪府天然記念物）				●	
	三草山（大阪府生物多様性ホットスポット、大阪府緑地環境保全地域）	●			●	
	里山林を利用したシイタケ栽培用の原木栽培			●		
	ゼフィルスの森	●			●	
	能勢町観光物産センター				●	
	能勢温泉や汐の湯温泉といった温泉施設				●	
	行者山 漁業組合のマス釣り				●	
久々地区：自然を親しむレクリエーションエリア						
	生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）	●				3-2 4-2
	自然アクティビティ 冒険の森inのせ				●	
	大阪府森林組合を中心とした里山ワークショップ			●	●	
	浄るりシアター				●	
歌垣地区：銀寄保全再生エリア						
	生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）	●				2-1 3-1 4-2
	銀寄ぐり原木母樹園（銀寄発祥の地）		●		●	
	クリ林再生プロジェクトの実施場所	●	●		●	
	ギフチョウ、キマダラルリツバメ等の希少なチョウ類や、ハチクマ等の猛禽類の生息地	●			●	
	倉垣天満宮のイチヨウ（大阪府天然記念物）				●	
田尻地区：里山資源活用エリア						
	生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）	●				3-2
	里山資源の産物「三白三黒」の地			●	●	
	田尻農産（直売所）				●	
東郷地区：歴史・文化エリア						
	能勢妙見山のブナ林（環境省 特定植物群落、大阪府天然記念物）	●			●	2-1 4-2
	生物多様性保全上重要な里地里山（環境省）	●				
	野間の大ケヤキ（国指定天然記念物）、アオバズク、ケヤキ資料館	●			●	
	地黄湿地（大阪府生物多様性ホットスポット、大阪府緑地環境保全地域）	●			●	
	妙見山（大阪府生物多様性ホットスポット、大阪府自然環境保全地域）	●			●	
	能勢ケヤキの里（直売所）				●	
	野間神社、清普寺、地黄城跡、真如寺等の歴史的遺産				●	

●：里山資源と関係性の強い施策

●：里山資源ではないが、本戦略において重要な施設（グリーンツーリズムの訪問先となる等）と関係性の強い施策

※3 表に記載されていない施策は、町内全域を対象とする重点施策

※4 重点施策の番号は3ページと対応



凡 例

- 特徴的な里山資源等
- 能勢町字割
- クリ林
- 特定植物群落
- 生物多様性保全上重要な里地里山

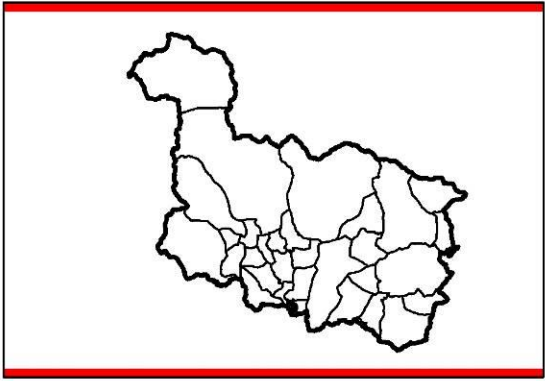
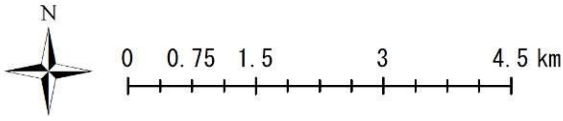


図 9 能勢町全域

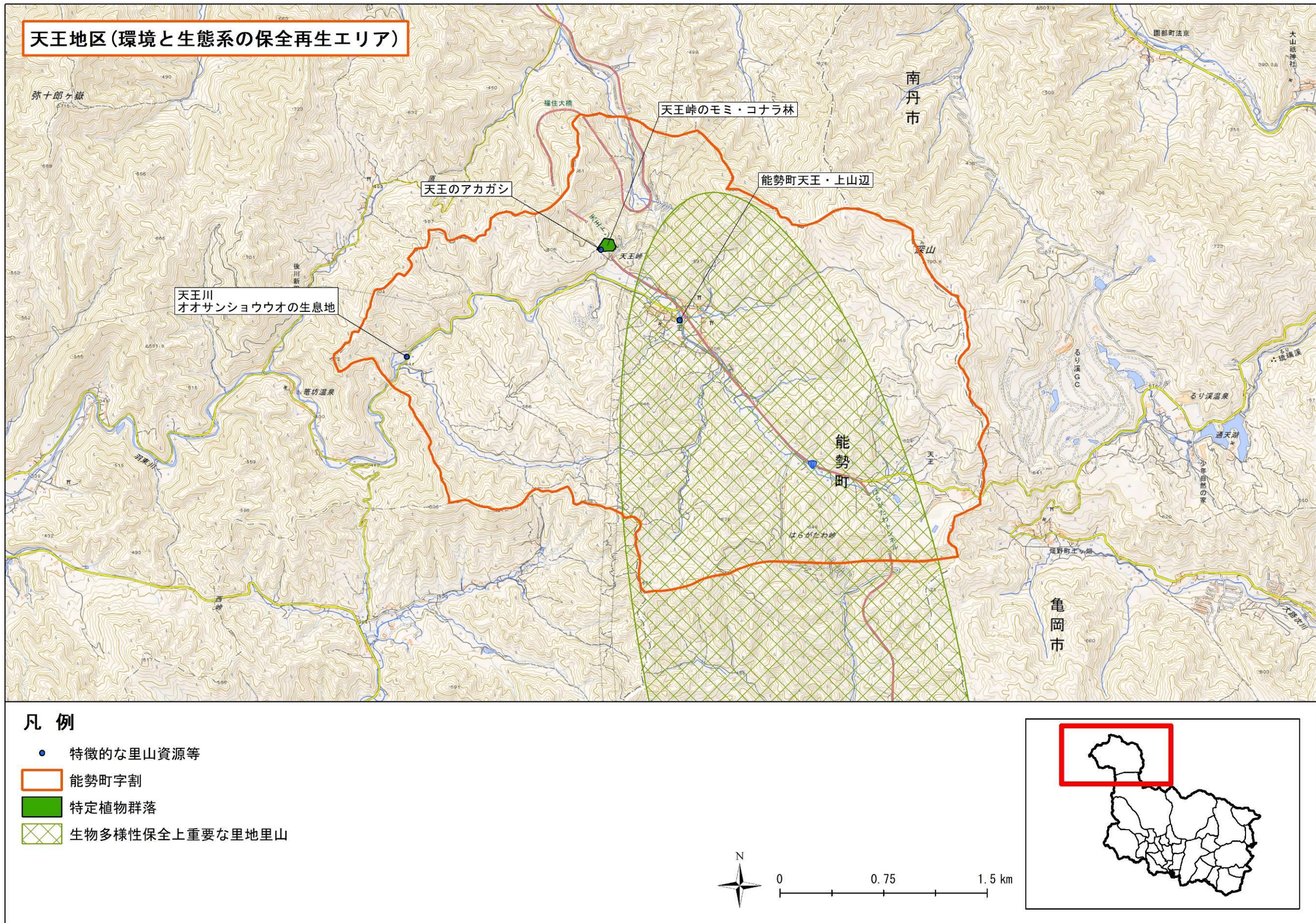


図 10 天王地区

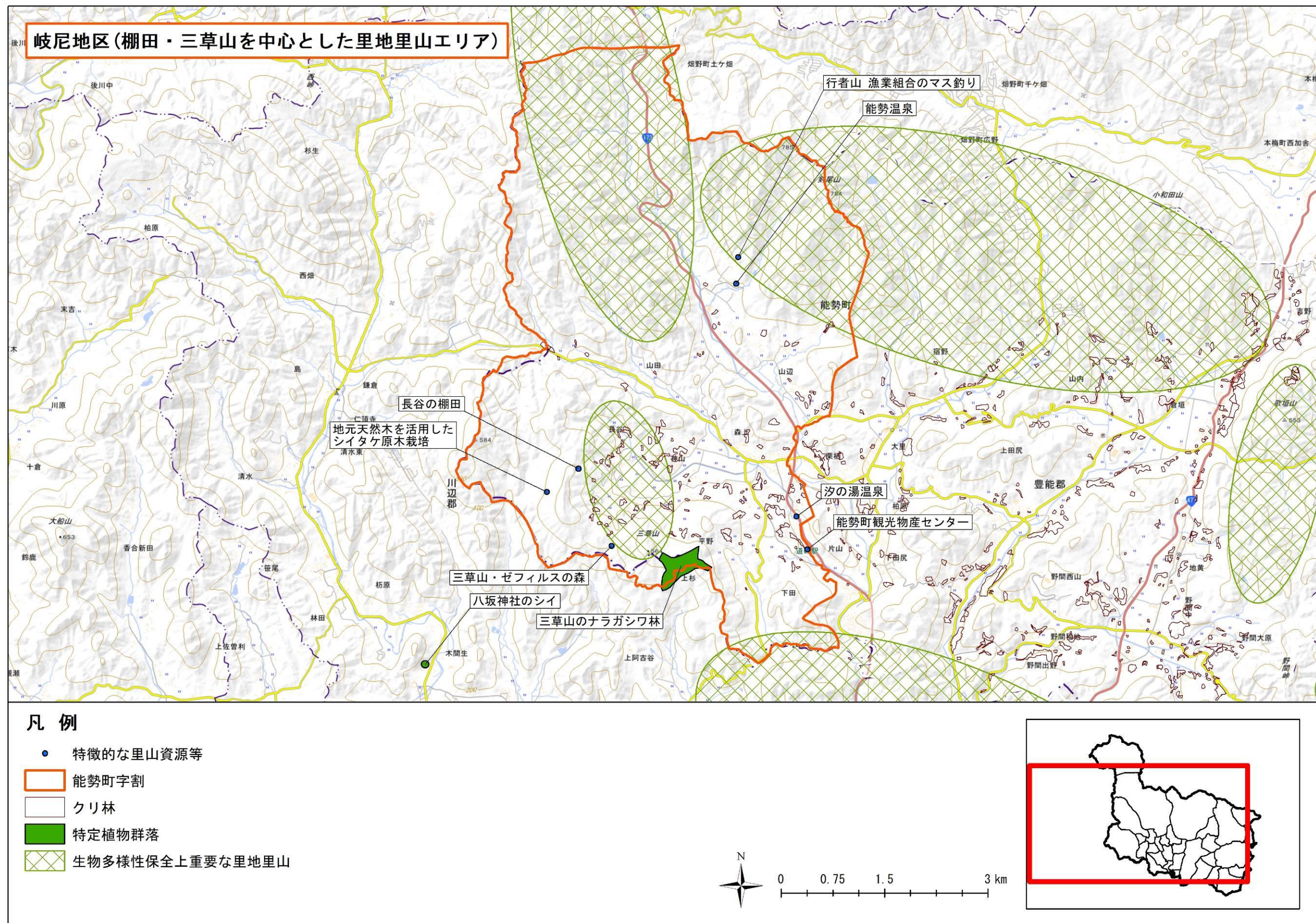


図 11 岐尼地区

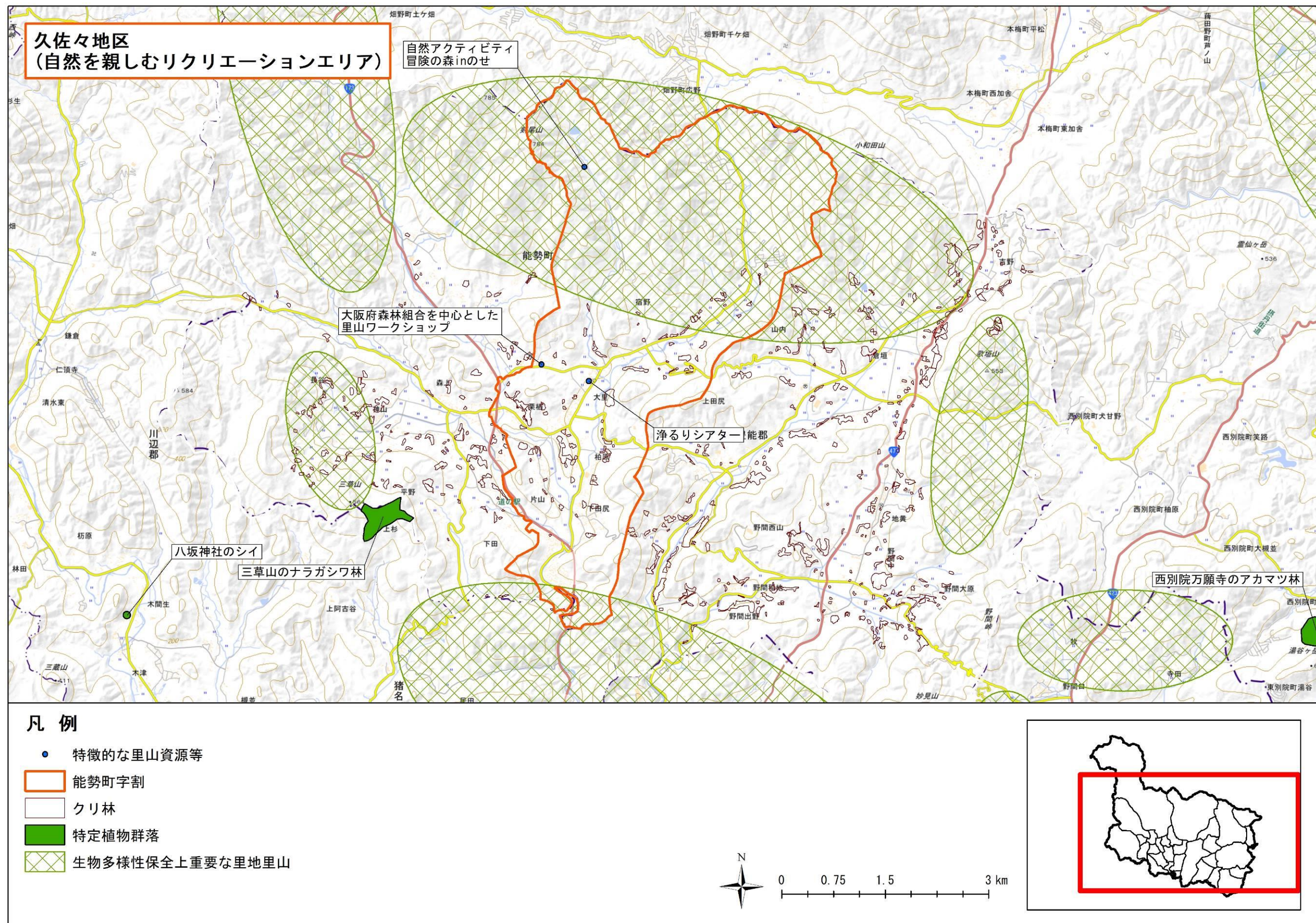


図 12 久佐々地区

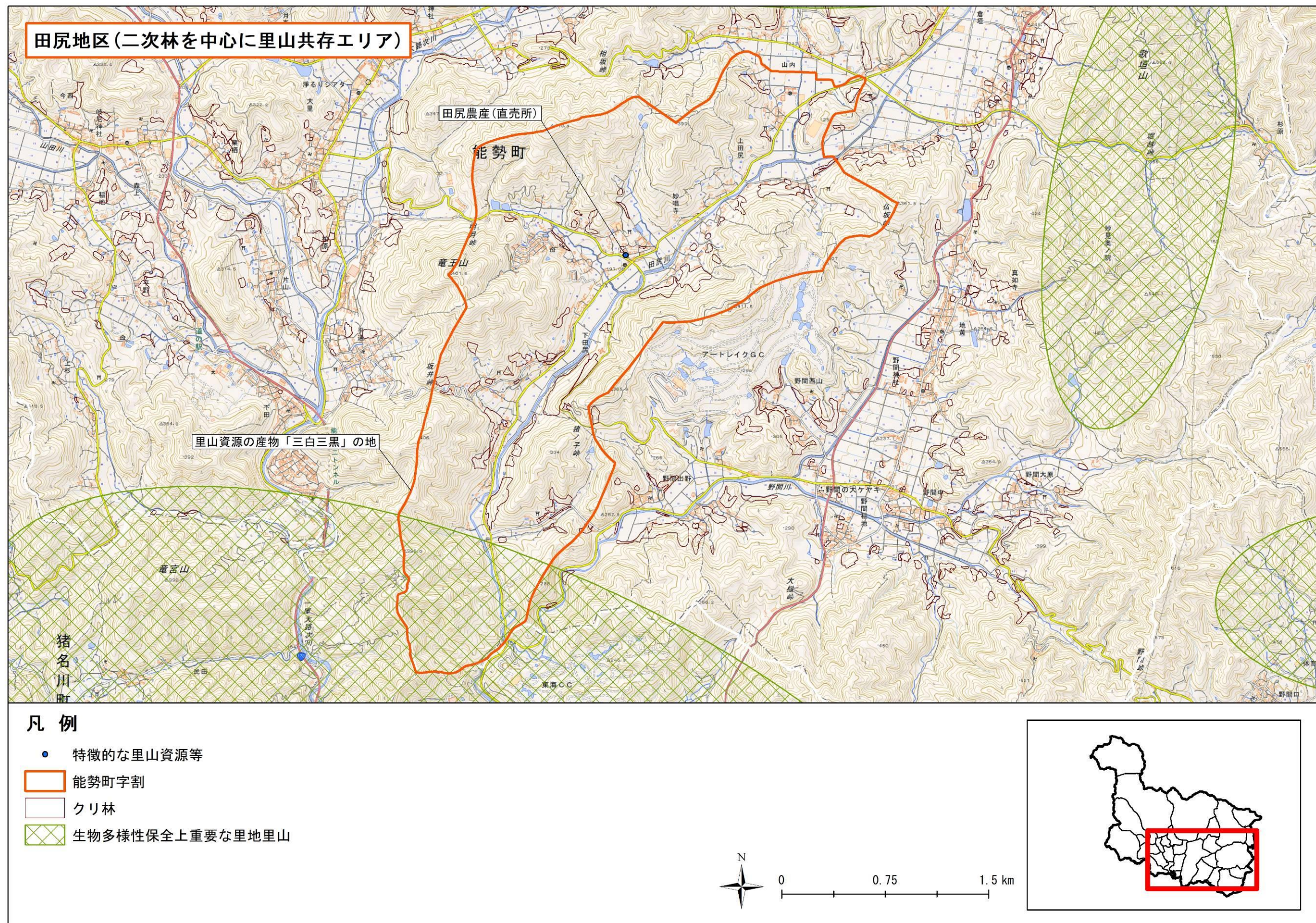
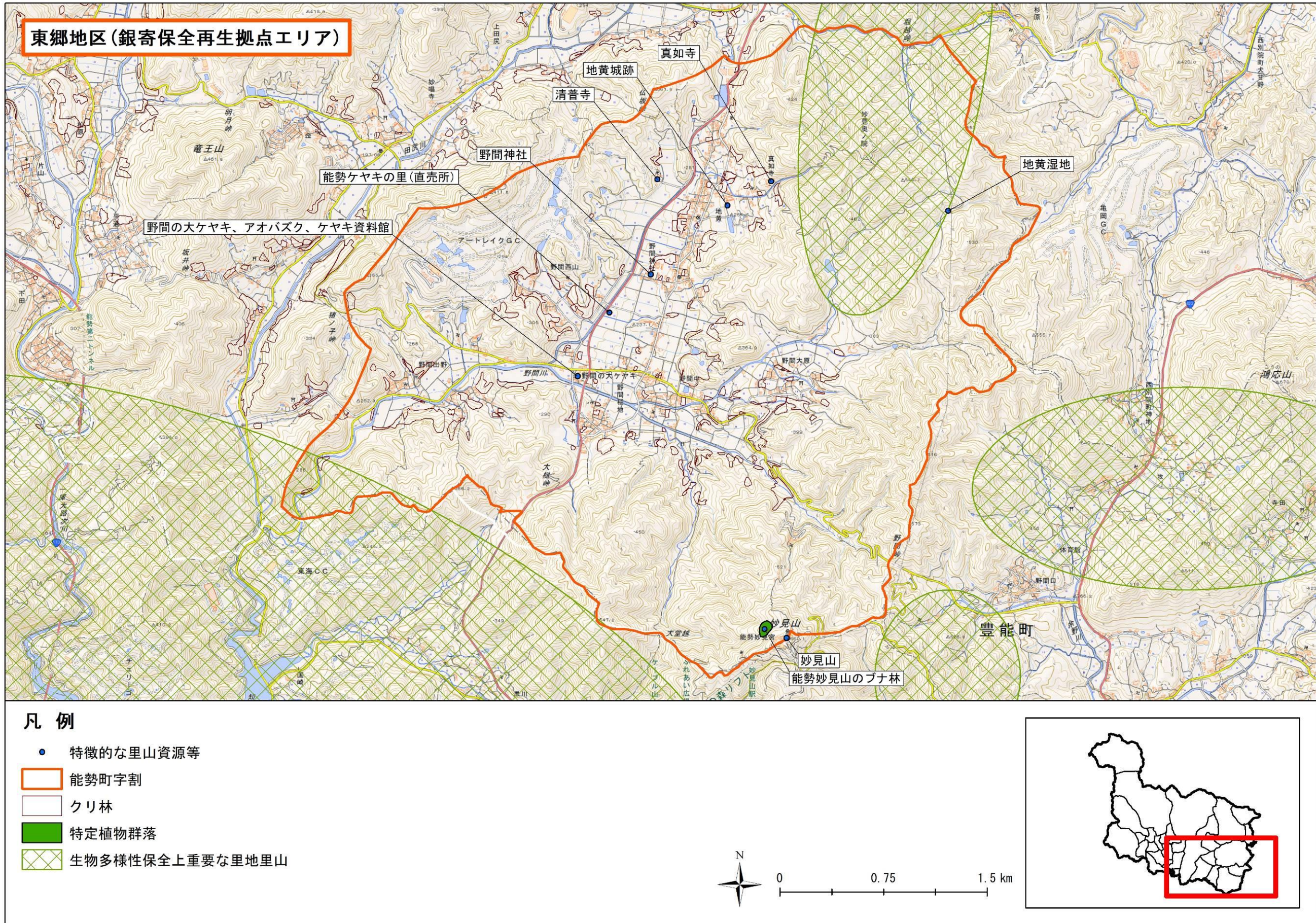


図 14 田尻地区



4. 地域戦略の実施と点検、フォローアップ

4.1. 戦略の実施体制

- ・ 本戦略は、多様な関係主体と連携し、地元との合意形成を基本的な原則として実施します。
- ・ 本戦略を推進していくためには、下記の表 3 に示すような多様な主体が、それぞれの得意分野を生かした役割のもと、連携して動くことが必要不可欠です。
- ・ 里山に手を加えるに当たっては、土地所有者や農業者、近隣の住民など、地元の人々と話し合い、社会的な合意形成を図りながら、取り組んでいくこととします。

表 3 本戦略の推進に関わる各主体

主体	期待される役割
能勢町	戦略推進の中心、各主体との連携を調整するコーディネーター、「（仮称）能勢地域自然資源開発センター」の実施内容および体制についての検討
能勢栗振興会	銀寄の栽培技術普及、銀寄の栽培意欲向上、森林資源利活用 of 取組
能勢物産センター	銀寄の販売促進、6 次産業化の推進に関する取組
吹田市	都市域の行政として、都市住民との交流に関する取組
能勢町観光協会	グリーンツーリズム推進、都市住民との交流、6 次産業化に関する取組
大阪生物多様性保全ネットワーク	特に生きもの視点での専門的な知見によるアドバイス、サポート等
大阪府森林組合	里山林の再生整備、能勢町産材の利用促進、森林資源利活用 of 促進に関する取組
能勢町商工会	グリーンツーリズム推進、6 次産業化の推進、企業の CSR 活動に関する取組
大阪府北部農と緑の総合事務所	施策推進のサポート

4.3. 点検とフォローアップ

戦略の実施状況を点検し、課題の解決に向けて検討するために、少なくとも年に1回、「能勢の活力推進協議会」を開催し、実施状況によって戦略の見直しや修正を行います。

「能勢の里山活力創造戦略」の実施に係る進行管理方法として、「CAPD サイクル」による進行管理が有効であると考えられます。一般的にはPDCA サイクル（Plan[計画]→ Do[実行]→ Check[評価]→ Act[改善]を繰り返し、業務等の継続的に改善する方法）が用いられますが、Plan[計画]をつくるのにとても時間がかかるのが難点です。

そこで、このサイクルを入れ替え、Check[評価]から始めて現況と課題を把握した上で、まずは何から Act[改善]していけば良いのかを整理し、その上で Plan[計画]を決めて Do[実行]に続きます。これにより、サイクルを回しながら想定通りに進まない事態が生じた際でも、順応的に計画を見直す等の対応が可能となる。この一連の点検のフォローアップは「協議会」において行います。

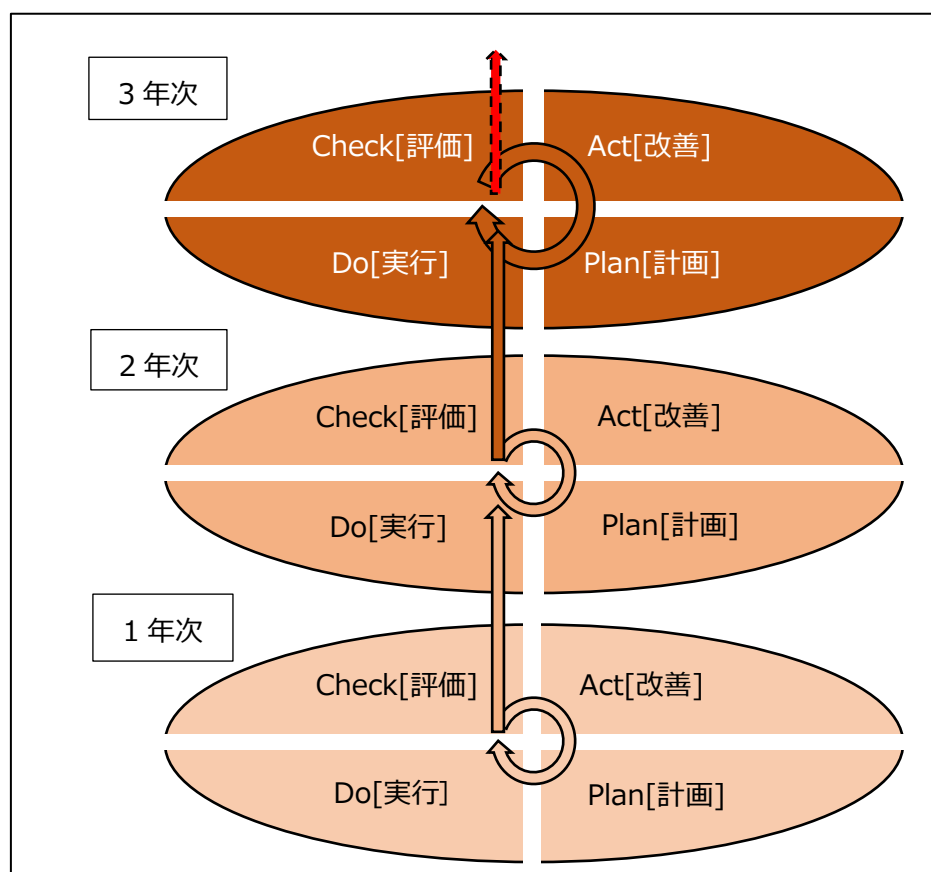


図 16 「CAPD サイクル」の模式図

平成 31 年 3 月発行

能勢町 環境創造部 地域振興課 産業振興係

〒 563-0341 大阪府豊能郡能勢町宿野 28

TEL : (072)734-0001 FAX : (072)734-1545

E-mail : sinko@town.nose.osaka.jp